

増築工事 1～義父が植えた木を使う

ヨメと呼ばれるようになって何年目頃だったろうか。仙台での高校時代の恩師の言葉が蘇った。女だけの高校で圧倒的人気の女先生がフランス語のような言葉で何かまくしたてた。それは彼女が青森に赴任していた時に知った、彼の地で嫁達の間で語り継がれている言葉だという。言葉はたしか津軽弁、翻訳すると『やればやったで言われるし、やらなければやらないで言われる。どうせ言われるんだったら、やって言われるよりやらないで言われたほうがいい』となる。虐げられた津軽の嫁達のみごとな達観。以後この津軽の嫁達の到達点を行動の指針とすることにした。まだ10代の食べ盛りの娘たちにこういう話をしてくれた先生も少なからず同じような思いをしたのだろう。インパクトのある津軽弁を披露して、今はまだその意味が分からなくても何十年か後にきっと心に蘇る言葉を、教科書を盾に早弁などをしている娘たちの心にしかけてくれたのだ。

こんな行動指針を肝に銘じたことなど忘れかけた頃、84歳の義父が増築の話を持ち出した。志願兵としての入隊前、19歳(昭和9年)の時に皆神山に植えた木で自分の寝るところを造りたいと言う。広告の裏に丁寧に描いた絵図面を差し出しトイレと風呂場、それに8帖の和室があればいいという。物干場と使っていないトイレなどわずかな下屋部分を壊しての約20坪の増築計画だ。山の木で造る、基本設計から工事監理まで全部自分でやれる、わくわくした。大学では造園学科に籍を置き、卒業後は町工場でベンチやあずまやなどの図面を描いていた私が建築の勉強を始めたのは息子が2歳の時だった。その後体調を崩した時期もあり、念願の住宅設計の仕事に就けるようになってからは10年余りだった。何を勉強していいかさえも分からない自分だったが、今できることを精いっぱいやるしかないと感じた。



増築前の風景



増築後

山の木は冬のうちに伐り倒して枝葉をつけたままにして水分を出す、いわゆる葉枯らし乾燥を行うことにした。こうすることで木の中心部から水分を出すことができ、心材と辺材の水分を一定にすることができるため挽いたときに反りが少なくなり色つやも良くなるといわれる。父曰く、このやり方は昔からやっていた方法だという。伐採の適期は木が休んでいる11月から1月にかけてで、この時期に伐採すると虫も付きにくいと言われている。伐採する木を選ぶ前にまず基本設計を済ませなければならない。計画の大枠を次のように決めた。①父母の循環の暮らしに学びこれまでの暮らしが続けられるようにするとともに、新しい循環の技術、空気集熱式床暖房のシステム(奥村昭雄氏が開発)を組み込む。②自分の木で造ったことを楽しめる建物にする。③義父母の年齢を考え車椅子生活にも対応できる設計とする。これは健常者にも使いやすくなるはずだ。④工事は直営で行い、できる工事は自営で行う。

冬の伐採に間に合うように基本設計を済ませ、製材業者、大工さんと共に山の下見に出かけた。皆神山の木を使うと聞いて製材業者は、“ここらの荒れた山にはロクな木はない”といぶかったが、山仕事を生きがいのようにしていた父が手入れした山は製材業者を驚かせた。このとき、手入れされた山と荒れた山の様相の違いを初めてしかも衝撃を持って認識した。材種は杉、ヒノキ、赤松、カラマツの4種類で、使い方は父からこの辺りのやり方を教わった。柱と虹梁は杉、梁は赤松、狂いの激しいカラマツは土台になら使える、そして19歳の時に植えたヒノキは土台・床板などに使うことにした。山の帰りに父の家に立ち寄った製材業者は、板目の長押を見て、「こんな材はウチじゃあ出さない」と言ったがそれはこの家も山の木で造ったことの証しでもあった。

翌日は夫と小学生の娘と三人で山に入り、目通りの径を確かめながら設計寸法の取れそうな木にナイロンテープを巻き付けての目印をつけた。計66本、材種や用途は表にまとめた。作業の間、少し離れた位置からカモシカがこちらの様子をずっと眺めていた。



木の目通り(径)を測る

伐採した材木 (丸太の材積 約38m ³)			
樹種	樹齢	本数	
平均目通り*	平均長さ		
杉	45年	43本	
240Φ	* 22 m	通し柱 4本 管柱 45本 虹梁 2本 壁・天井板 86m ²	垂木 間柱 2階根太 筋交い 破風・広小舞 化粧野地板
檜	65年 45年	5本 2本	
330Φ	* 22 m	床板15t 43m ² 土台 12本 壁・天井板 16m ² 建具 8本分	浴室すのこ 敷居
唐松	47年	1本	
360Φ	* 18 m	階段側板 2枚 土台 2本	野地板
赤松	50年	15本	
480Φ	* 25 m	梁・胴差 31本 階段板30t 11枚 床板15t 20m ²	野地板



手入れされた山



この状態で春まで乾燥させる(伐採直後)

1998年冬、山林業者に依頼して伐採。翌春、雪の消えた山へ行ってみると切り倒されたときは青々としていた枝葉はすっかり枯れ、茶色に変色していた。枝を落とし4m前後に玉切りし、近くの製材所へ搬入する。赤松の搬出がずれ込み、ややアオカビが入ってしまった。当時、製材所はほとんど外材を挽いていたが、数年前までは近くの山の木も扱っていたという。材の葉枯らし乾燥と並行して進めていた実施設計図面を大工さんに渡して木取りをしてもらい、製材にこぎつけた。柱や梁の構造材は大工さんの加工場へ運び、板材は父の家の使われなくなった蚕室に運び込み、更に時間をかけて乾燥させる。板材の乾燥は栈木をあてて横積みする方法かと思いきや、父が言うには「板は立てて乾かすもんだ」とのことで、夫が担当した。



玉切りされた丸太の搬出



製材作業

建前までの間にやることがもう一つ、トイレ等下屋の解体作業があった。これも父の指導のもと家族総出で行った。まずは瓦を手渡しで降ろし、構造材をのこぎりで主屋から切り離す。あとは綱をかけて皆で引き倒す。柱や梁は風呂の燃料となり、壁は全て土にかえり、廃材として出たものは衛生陶器、磚子、布巻きの電線コード程度ですがすがしい解体作業だった。あとは材の乾燥と大工さんの刻みを待つて建前となるばかりだ。



板材を立てかけて乾燥させる



家族での解体作業

(続く)